

「と言う事は翔平さんの時みたいに使途不明金を」

「そうですねその通りです、あの一件から補佐官自ら収支帳簿を持ち出金に携わっていた。忙しいのか面倒になってしまったか、帳簿を又国王来日準備委員会に預けるようになりました」

「で、数字の達人さんは使途不明金に眼が入ってしまった」

「はいその通りです、昨年から今年にかけて六回あるのに気づきました。先輩この出金、何だかわかりますかと聞かれました、補佐官が言うには観光客誘致には出金は多い、準備委員会以外に出金はあると答えていました」

「大河原さんはそれで納得したのですか」

「腑に落ちない表情をしていましたがその場はそれで済みました。チームいつぶくの皆さん方が仰る通り翔平さんの事故が他殺ではないか、私の心の隅とは言え彼が心配になりました」

「うーむつ、あるしもなかれだが刺激しないよう今は静観、そつと観ていて下さい」

一平は言う。

「はい、そうします。マキちゃんも元気だし一安心しました、明日は仕事がありますので失礼させて頂きます。治ったら一杯やりましょうね」

と言いながら幸子は病室を後にした。

「一平さん、山と積まれたこれらの見舞い品、花は兎も角いくらマキでも食べきれない、捜査課の面々にも手伝ってもらう予定だ、一平さんも消費に手伝ってくれ」

父っ様は大袋を七つ一平の脇に置いた。

「いつぶくに来られた皆さんに特別サービス品ですと食べて頂こう、まりに言っときます」

いつしか面会時間が過ぎていた、マキに父っ様と一平さんは明日また来ると伝え病室を出た、脛に青あざが残り小さくはなつたが腕の包帯が眼に付く。

そんなマキだが退院許可が出た。村上捜査課長は退院手続きを済ませた、マキの希望で早馬口での帰館と相成る。三人は頂き物の缶コーヒーとパンセにケーキで一息入れていた。

こんにちわと幼稚園園長の田島利一先生と教頭の柳田麻耶先生が入って来た。

「マキちゃん退院だつておめでとう、早く出来てよかったね、でも慌てたよお見舞いに何時行こうかの矢先の事だ、麻耶先生に今日退院だと聞かされ、とり急ぎ来ました」

「園長先生有難うございます、また先生方も大勢来て下さって重ねてお礼申し上げます」

「私も園長先生もそうですが一番喜ぶのは園児達ですよ、口々にマキ先生は何時から来るのと頻りです、もうすぐ出て来ますよと慰めもしばし」

「マキは確り保育していますか私にはどうも、頭を小突いたりしませんでしたか」

「村上さん、娘さんから保育状況をお聞きにはなさいませんでしたか」

園長先生が村上捜査課長に訪ねた。

「内じゃー料理に酒と鳥撮りと事件絡みな事だけ」

じゃー私から幼稚園でのマキ先生をお話ししますと麻耶教頭。

「いつしか園児達は飽きも来ます、カリキュラムを熟しながらお部屋の状況を見、アドリブで入れるんだ。それが上手なんだ、子供たちはいつしか先生の方に向き直り聞き入ります」

「そのアドリブとやらはどんな事ですか」

「難しい事ではありません少し前だと今でしょ、おもてなしを手でその仕草、じえじえなんてのもあつたな、AKBは元より乃木坂を入れたり、エクザイルはグルグル上体を回しながら♪チュウチュウトレンすれば大騒ぎ、先生の後に付き真似する園児も、話が嵐になれば女の子にはファンが多くそれはそれは、保育中に的確に入れて来るんです、私もそうですが他の先生方もあの真似は出来ない、マキ流保育に完敗です」

「そんな事ばかりやっているとかリキラムが熟せないのでは」

「村上さんご心配には及びませぬ、そうであつたら私が許しません」

と教頭が言った。

「話替えましょうよ」

とマキ、否話は終わっていないと園長が。

「部屋替え時、マキ先生のお部屋にして下さいと申し出る保護者が多くなりました、他先生の立場もあるので園にお任せして下さいとだけお答えします」

「それで保護者は納得しましたか」

「する訳がない、当園では昨年から週二回学年ごとに保育をする様になりました、苦情も少なくなりました。子ども達も違うお部屋の人達とも話し、遊ぶようになり視野が広がりました。娘さんのお陰です、一度保育状況を見に来られては如何でしょうか」

「園長先生その位で終わりにして、父っ様に言つたつて分からんよ」

「言わなきやーもつと分からん」

「父っ様だつて自分が聞きたいと想う捜査状況、家じゃー何も言わんじやーないか、言うとすれば今日は戻れんとか飯、風呂、洗濯しといてだけやん。こないだなんか洗濯もんの中から自分の下着をじつと見つめ何言うかと想つたら、紐の様なパンツ履いてんのか、これ役になつてんのかとききたもんだ」

「捜査と保育、家庭は別や」

「何が別よ自分勝手すぎる、一平だつて女心を分かっている、父っ様！再婚でもしたらそうすれば女心が分かる」

園長と教頭、一平は苦し笑する。

たまりかねた一平、お二方ともその辺でいいじゃーないか、今日は退院のおめでたい日ですと割つて入った。

翌日早朝、一平はマキの様子を見に道場を訪ねた。

「おー一平殿早いな、マキはまだ眠っていると想う、久し振りに座禅でもすつか」

一太郎は道場裏手のケヤキの大木に一平と向き合い、胡坐をかいた。

半時が過ぎた、時折往來する車音が塀越しに聞こえるが風もなく静寂している、一太郎の左頬がピクリと動く、
瞼を開き閉じた。

「マキか、不覚を取ったようだな傷はどうだ痛まんか」

「痛くないよ、それにしても抜き足差し足忍び足って言うかな、そーっと近づいたのに何で自分が来たのが分かったの、
後ろに眼があるの」

「後ろに眼がありヤー化けもんや精神統一、無になれば周りが見えて来る、後半時で終わりにするお前も付き合え」
一太郎と一平の間に胡坐を掻いた、一太郎は静かに話し始めた。

「大したこと無くってよかった、胡坐で脛は痛まんか」

「痛まないよ」

「一週間前、暴漢に襲われたと裕太郎が言つとつたが」

「相手は眼だし帽の三人、北野流十八番の空中戦で対処していた、不意に後ろから枯れ枝を飛び上がりざまに足
に投げられた、体勢を崩しそのすき背後から首締め合い自由を失う。後はご覧のあり様」

「その時お前は三つの過ちをしていた」

マキを怪訝な顔し爺っ様を見ようとした、座禅姿勢を崩さんようにと一平が手招き。

「いいかマキその一は精神統一だ、無になれば後ろの敵も見える、その二は自信過剰だ、今迄道場を問わず一度も
負けた事がない、それは自信でもあり自慢でもある。それが災いし気の緩みだ、その三は衣装だ、僅かな布切れだけで
暗い道を歩けば襲われて当然、ましてや僅かばかりの布切れスカートに紐パンツでは必然動きに制限はある、衣装を

改めよ」

マキが爺っ様、女性下着のファッションと言いだした所で一平は無言で制した。

「敢えてその四を加えるならば、行って来ますと家を出たならば息災で笑顔で帰って来るにある、ベソをかいて帰って来るようじゃー行かん方が良い、ついでにその五は自分より争い上手な人、保育上手な人は大勢いる事は忘れてはならん、もう一つおまけだ六つ目はわしの年になるまでに七十年弱ある、大勢の人と出会うであろう、そんな時ネガ的話もあるうが互い突っ張り合つては進みません、退院の日、裕太郎との突っ張り合い、あれは何だ、自分達の主張ばかりで交じあいが見えん、ネガするならば妥協点と言うか代替え案を示すのも必要、以上六つ言っておく。後四半時で座禅は終わりとするが、久しぶりに一戦交えるとすつか、マキ」

マキはこっくりする。

二人は神棚に向かつて一礼、互いに向き合つて一礼、一平は二人に対し手加減無用、無制限一本勝負を告げた。

マキが仕掛ける、バック転しながら脚で顎を狙った、一太郎はすかさず横っ飛びし足蹴りで返した、体勢を立て直した一太郎は天井高く飛び上がり強烈な鉄拳を額めがける、読んでいたかマキは左手で跳ね除けざまに回転し脇腹に鉄拳、みまうも交わされる。

一進一退が続く、足技と空中戦を得意とする北野流は見ものだ。

二、三歩動き効き足で畳を蹴った、天井の棧に足指で掴みマキは逆さになる、一太郎も後を追う、手を構え二人は眼鏡く見合った。二回転し一太郎は畳に戻る、マキは降りるふりをし回転加えみぞうちを狙った、交わしながらバック蹴りが炸裂、咄嗟に身を引くが両方の胸の膨らみを震めた。怯まず全回転し懐に飛び込むが軽く交わされた、その場跳びしマキは一太郎の背後に立った、抛をつかれた一太郎だがしゃがみ込み起きざまに痛めている腕を狙う、軽くかわし足蹴りを食らわす、ひたたる汗も拭わずだが時だけが過ぎる、持久戦だ。

立ち構えるも、もう互い相手は霞んで見えんだろう、一太郎は後退し離れるふりしながら前転足蹴りを顔面目がけた、外され攻め込もうとした時、一太郎はウツと小声を発し僅かながら体勢を崩す、すかさずマキの右足が弧を描き一太郎のこめかみ目掛ける。

「それまでと」

一平は大声を発した。こめかみ数センチの所でマキの脚は止まり下ろす。

「一本あり、勝負はこれまで」

一平は神棚に一礼する様に促し二人の手を取り合わせた。

「マキ、良くやったマキ、お前はわしを越えた、教える事はもう何もない、後は自分で研究し技と自分を磨くんだ。ただ気になるの事が一つ、父上裕太郎との仲だ、父娘だ、お前等には口出しはせん、が、これからをどうすればいいか二人で良く話、相談しベターを探せ」

一太郎は汗びっしょだが眼にはそれと違った汗が、珍しくマキにハグを求めた。一平は大きく柏手を打った。

一平さんどうだいシャワー浴びて朝飯食っていかんか、飯ももうすぐ炊けると一太郎が言った。

「でも急には足りんのでは」

「ご心配なく、それとまりさんには先程連絡しといた、怒られはせんよ」

「それでは頂いて行こうとします」

「裕太郎はわしより先に起き何をやってんだかごそそしとった、そんな折、進展があつた至急来てくれと電話が入り捜査本部に赴いてしまった。そ奴の分がある、捨てるものもなんだ食っててくれ」

「道主様了解」

囲炉裏をコの字に囲む、ニジマスの塩焼きとシヤケの切り身が中途半端な皿に乗っている、マキがご飯と味噌汁をよそう、さあ食べようと一太郎が。

三人は今朝の出来事は一切口にせず世間話、一平が神妙な面持ちで起こらんで下さいと一太郎とマキに尋ねた。「マキちゃんの料理にしては違い過ぎる、何方が朝飯支度しなされたんですか、全くの素人さんを頼み始めたのですか」

一太郎とマキは顔を見合わせ大笑い、一太郎が徐に話し始める。

「シヤケは兎も角ニジマスの塩の振り方がなつちよらん、おまけに焦げ加減、ご飯も柔らかかめ、明らかなるは具の切り方です、全くの素人のようです乱切りを通り越している」

今度はマキが言った。

「なんの風の吹き回しか父っ様を作ったのよ、厨房でござと想ったら鍋釜、包丁と格闘していた、後は味噌入れるだけでもう直ぐ朝飯出来るからなと言いつつ呼び出され、捜査本部に行っちゃった」

「いやーそうだったんですか、捜査課長直々の朝飯食べられるとは光栄です」

「裕太郎に言うておく、これに懲りず又食べてやつて下さい」

「是非とも呼んで下さい」

想わぬ朝飯に在りつけてた一平はまりの元へ。

「どうでした裕太郎さんの朝飯は」

厨房に立った事のない人にしては上出来だ、と言い窓越しの今にも泣きだしそうな灰色の空を眺めた。あっそうと言いながらまりはポタージュスープをテーブルヘトーストにハチミツを伸ばし口に、・・・二人の無言が続く。

まりが食べ終わりがけた、その時ルパン三世が喚き始める、裕太郎さんからだ。

「一平さんマキが何かとお世話になり有難うございました」

「いや、他ならぬマキちゃんの為だ惜しまないよ、それよりも朝飯美味しかったよ御馳走さん」

「ぎえつ、一平さんあれ食べたんですか、俺どうすつればいいんだ」

「小生好みのおかずもあった、美味かったと言っているじゃーないか、それより何か伝える事でも」

「おーそれだ、今朝三時頃捜査本部に垂れ込みが遇った、監察官の元情報屋を追えと女の声で入ったんだ、公衆電話からだったがチンピラと言いかけて所で切れてしまった」

「女と特定出来るのですか」

「偽声等考えられるが現在は女性として捜査している、何か動きがあったら又電話入れます」

「ありがとうございます、そーしてくれ」

早くマキちゃん傷つけた犯人挙げてよとまり、一平は又浮かぬ顔で空を見つめる。

「どー想う女性からの垂れ込み、110番ならともかく三鷹署の捜査本部へ直接垂れ込んで来た、公開捜査し情報をお待ちしていますとかで電話番号を記すれば別だが」

「捜査員が教えたとは考えられない、刑事ドラマでようやくやっているよ」

「経験からだがそれはない、見込みあるとしても極少数であつて不特定多数には教えない。通報したとしても氏名を名乗るとかし途中で切ったりはしない」

「ではその女性は誰なの、どこで三鷹署の電話番号知ったか」

「今それを考え思い当たったんだ、110番は警視庁に繋がるが市外局番に0110をプッシュすれば区市町村の所轄に繋がるようになってる。これを知っている人」

「でも大勢の人が知っている、だいぶ前だけど回覧板に調布署からで「振り込み詐欺にご注意、おやつと想ったら直ぐ110番若しくは調布署0110番に連絡を」なんて書いてあつた」

「実際の所どれだけの人が覚えてるかな、咄嗟には110番ではないか」

「だとすると一平は途切れた電話は誰だと」

「電話の内容を実際に聞いたわけではないが0110番を良く使う人、或いは咄嗟にでもすぐプッシュできる人、即ち警察関係者ではないか、これから三鷹署に行つてICレコーダー聞いてくる」

「いつてらっしゃい、私は下りていっぶくの準備始めます」

捜査課長が待つていた。連れ立ち声紋鑑定室に、窓はなく八畳ほどの部屋だ、係官がこちらへどうぞと訳の分らん機材が並んでいた、中央の大テーブル脇の椅子を引いてくれる、ヘッドホンを耳に「監察官の元情報屋を追えチンピラツ」で切れている。

「デカ長さん、低く押し殺した声です、途中で終わってしまったのは切りざるを得なくなったからだと思われ、人目を盗んでかけたに違いないと」

「声紋はどうでした」

「取れています、これですが前はなかった」

「声をダビングして下さい、心当たりがある聞かせてみます」

「訳ないですよ、ちょっと待って下さい」

特殊隊に持ち込んで皆に聞いてもらうんだと一平は言う。

「じゃー何かい、一平さんは垂れ込み女を行方不明の寺島加奈とみているんで」

「そーです、確証はないが今までを総合すると彼女が出て来るんだ」

出来たよデカ長さんと係官が。一平は頭を掻きながらデカ長ではない、その呼び名は勘弁を。

「ははーそうでしたねデカ長さん、いけねー谷端一平殿。並みの声ではない、先も言ったように声を殺し低音で十五文字だけ、聞かしても分からんだろ、声を変えてももう少し話していれば身近にいる人なら話の特徴で分かるが、谷端さんお役に立てばいいんだが」

礼を述べICレコーダーをしまい捜査本部去った。

早馬口に跨り日光市は今市に向かった。

鹿沼で昼食をとり今市の寺島さん宅に着いたのは午後二時少し前、バイク音に気付いたか麦わら帽子ちよいとあ

げこつちを向いた。

「おー東京の文屋さんかい、田植えはもう終わってしまったがな今日はなんかと」

「聞いて頂きたい声があります」

家にばあさんいる、今行く縁側で待っていてくんな、田の取水堰を調整しながら寺島さんは言った。

「おんや何時ぞやの文屋さんでねーか、お茶とお茶菓子座布団持ってくるからお待ちになつて」

「途中のPAでおいしそうな食パンがあつたので仕入れて来た食べて」

「何んにもいらぬのに、折角だ爺さんに夕食にサンドイッチとやらを作ってみるとします」

「迷つたんだ、喜んでくれてありがとう」

寺島さんは水を含んだ泥だらけと言うか田方向から庭に入つて来た。

「爺さん、又もやそんなに汚して一日に何度着替えるんや」

「客人の前でそれを言うでねー」

仲のいいお二人ですね、縁側に腰かけながら一平は言う。

「一平さんとか仰つたよな、何か聞かせたい声があるとか」

ばあさんが入れてくれたお茶を一口飲み今お聞かせします。

ICレコーダーを出し「監察官の元情報屋を追えチンピラツ」を聞かせた。

「女の声であるようですが、おつかない事言っているようですねこの声」

「聞き覚えはないでしょうか、例えば栃木なまりとか」

「あいや、僅かで何とも言い難いな、栃木は福島弁と似通つたところがある「あ」を「え」と発音し会津をエイズと言うように、ここでは「い」「え」が混同、例えば色鉛筆をえろいんびつと言うように、声聞いた限りでは尻上がりもなく栃木の人ではないようです」

「有難うございました、狙いを変えて調査してみます」

「あんはーこれ聞かせる為にここまで来たつと」

「文屋家業はそんなもんです」

「娘の所在伝えに来たかと想った」

「残念ながら未だつかめていないんだ、掴めたら直ぐにでも伝えに来ます」

「ばあさんもわしも娘は息災しておると信じている。前にも言ったかと想うが便りねえのがその証拠、殆どと言っているほど便りしねー、だが合宿の時は寝静まったのを見定め、ばあさんとわしの間に潜り込んで来る、これが楽しみなんです。間が空けば空くほど郷愁にしますと、娘は今回もそれを狙っているものと想います、事実私は元気にしていますと文を出してきています」

「親想いなんですな娘さんは」

「それよりも秋の収穫に来てくんはなはれ、ばあさんと二人じゃー堪えると」

お分かりしたと言い、小一時間世間話をした。素朴な寺島さんにはこの声、娘さんに似ていませんかと一平は言い出せなかった。

帰路、羽生SAで特殊隊長の樋沢源三に連絡をとった。

「おお一平さん、今日まで富士裾野で訓練中、電話で用が足りれば聞くが足りなければ明日は本庁地下で武道訓練している所で聞きますが」

「電話では無理だ明日そちらに出向く」

「待っている、午前中なら余裕がある」

では明日と言って切った。今日の予定はこれまでだ、まりとマキに土産を何かと物色すれども佐野ーメンに落ち着いてしまう、又これと言われつつも満更でない二人だとブツブツ。コーヒー飲み休息、何時もより呼び出し音が大きく聞

こえた様な気がする、村上捜査課長からだ。

「おー一平さん、今市の情報は後で聞くとしこつちから話します」

一平はこちらはこれと言つての情報は無い、話を聞こうと言う。

「来たんだよあの男が」

「あの男とはキザなキャリアか」

「その通り、デカ部屋にパイプ啜えて入つて来たんだ、所定の場所にしか灰皿は置いてない、どうするかと想つた矢先ゴミ箱にポンポンしゃがつた、若い刑事が何すんだとばかりな眼つきすると俺はキャリアとばかり罵声を浴びせ、ふんぞり返んの」

「捜査課長も大変だな」

「ここまでは想定内だが尚も想定外が続いた」

例の井の頭での三人組の暴行事件の事かなと一平。

「その通りだ、被害者は軽傷だし退院もしている、捜査本部を解散とは言わないが縮小しろと、若いもんが襲つたチンピラ二人には余罪がある、と言いつ追つて何が悪いと言いつ追つた」

「その後は小生も想像がつくが」

「そんな奴等を追うより振り込め詐欺が横行しているそつちを追えと来た」

「その後何を言つてきたと想う、想定外だ。この署長は来春には退職を迎える、それに影響ないようわしの言う事を聞いとけときやがつた」

皆はどうした、それを聞いた時はと一平が。

「常日頃真実と市民の安全を言っている署長だ、皆は齒を食いしばっていたがそんな署長を想うと誰とはなしに従わざるを得なかつた。一平さんすまん、捜査本部は縮小せざるを得ない」

「課長、その判断合っている、キザ監察官は小生の中では限りなく黒となった。マキちゃんは何と言うかそっちの方がた
いへんだ」

「一平さん、何か良い策はないだろうか」

「マキごめん、こうしないとあの部下想いな署長が更迭されてしまうとしても」

「その辺から話してみます、今市はどうでした」

「手掛かりになるような事はなかった、在ったとすれば親想いな寺島加奈であり娘を信頼しきっているご両親だけだ」

「捜査本部は縮小するが一平さんはこれからは」

「明日、榎沢隊長にICレコーダーを持ち込み聞いてもらおう、最も近い日に寺島加奈と話交えたのは特殊隊の面々
だ、僅かでも彼女のしゃべり方に特徴でも分かればと想っている」

「一平さん捜査本部は縮小しても残ったメンバーで、真実と市民の安全にも今回の暴行事件を追い続けます、署長
もそう想って頂けると想います」

「くれぐれも心優しい署長をお忘れなく、佐野ラーメン仕入れたよ」

「御馳走さま、道中お気をつけてお帰り下さい」

朝食を食べ新聞に眼を通してしているとガラケイが鳴った、マキだ。幼稚園への準備中ではないかと想いつつONにした。

「特殊隊に行くんでしょう、自分を連れてって」

「おおおーい、怪我はどうなんだ大丈夫か、それに今日は遊びじゃーねーんだ、ましてや幼稚園はどーするんだ」

「お生憎様、昨日は日曜参観日で今日は代休、自分はチームいっぶくの重臣である事をお忘れなく。暴行事件縮
小は父っ様から聞いたよ、しどろもどろでね、どうせ一平が知恵付けたんでしょ。それはそれで良しとしますがー桜田門
に行ってみたい」

「遊びではなく重臣としてなら、いくら昼間でもちよこんとした布切れ仕様はタブー」

「分かっているよ、爺っ様から言われたばかり一ヶ月は我慢します」

「一太郎さんの言、忘れんなよ！つつじヶ丘八時半、遅れんなよ」

「マキちゃんだつてのりちゃんのご主人の為に一生懸命なのよ、素直に連れて行っておやりなさい」

朝飯の片づけしながらまりが言う。

バスの都合で少し早めに駅に着いた、時刻表見ウロウロ、一平とでつかい声。ガウチョパンツにインナーにキャミソールでスキッパーシャツのマキが階段の上がり端で手を振った。痛みがとれ傷口は塞がったがそこが不規則に見えるんだろう、大きなバンドエイドを貼っていた。包帯はしていないが何時もよりマシだと想いながらそつと右手を挙げた。快速に乗り込んだ、まだ通勤時間帯だ僅かながらつり革が空いている程度、しめしめ、これなら小生に肩が触れる程度で済むだろう、何時もの様にベツタリとくっ付かんだろう。

小生の考えは甘かった、つり革を左手で掴み右腕を腰に回し右胸を左腕に押し付けるように、これじゃーいつも以上だ、明大前で大分空いた。頭をちょこんと肩に載せ始めた、小生等は乗客には否応なしに目に留まる、マキは涼しい顔しているが小生はじゅわつと背が熱くなる、乗客はあの爺っ様いい年しやがって、朝から小娘をとでも言う顔している、早く着かないかな。

乗り換えを含め五十分弱で桜田門駅に着いた、四ゲートを出て三分で本庁に着いた、正面玄関受付へ行く名を告げる、隊長が連絡してあったとみえ受付嬢さんは承っております、こちらに必要事項を記入して下さいと言った、記入し渡すと入庁許可証が。札を申し地下に、武道場方向から気合いが聞こえる。特殊隊の事務所兼休息場へ、樞沢隊長が怪訝そうな顔をして右手を挙げる、一平も返した。隊長は道着を直し椅子を勧める。

「訓練中お邪魔させて頂きまして有難うございます」

「一平さん俺との仲じゃーないか堅苦しい挨拶は抜きにして」

「そー言ってくれるとありがたいよ、今は一偽文屋の身だ」

「デカ魂とやらが騒ぎよっていますなー」

と言いつつこちらはとマキを見た。

「おおーごめん何時ぞや、お茶漬けトンカツで一緒したマキだよ」

「衣装が違うので別人かと想ってしまた、ごめん。一平さんが羨ましいよ、こんなにも可愛いお嬢さんを連れ歩き助手にしているなんて」

「幼稚園が休みで社会見学と称し是非とも連れて行けとせがまれて」

「一向に構わんよ、とくと観て行って下さい、隊員の武道ぶりも」

隊員さん達は組合い、汗を流すも休憩室が気になる様だ、チラッチラツと眼をやっている。

「で、今日は私に何か聞かせたい物がある言っていたが」

これなんだとICレコーダーを取り出し再生矢印を押した。

「監察官の元情報屋を追えチンピラツ」

「これしかないんだ、この声に聞き覚えはないか」

「低く押し殺した声だな、何度聞いても分からんな」

「うー、残念だな、この声聞いたことあると言うかと想ってた」

「と言うと私の身近な女だと、うちの上さんと受付嬢だし、あとは特殊隊にはいないし後誰だ」

隊長さんはここは女っ気ないんだと一平に言う。

「特殊隊はお茶くみのお嬢さんもない、以前は紅一点寺島隊員がいたが今は行方不明になっている、そんな男所帯だ」

「その寺島隊員には似ていないだろうか」

「彼女とは訓練中、号令を交わす程度、これと言って話したことがない」

「そーか、では隊員でプライベートの付き合いはなかったか」

「マキちゃんのように器量良く愛想も言いし気取らん、和気あいあいとした隊員はいたが」

「その隊員らに聞かせては貰えんか」

「間もなく休憩に入るそしたら聞かしてみます、と言ってもさつきも言った通り女っ気がない特殊隊、マキちゃん観てはそわそわし始めている、気合いを入れんとと思うが今日は特別に休憩を早めてやろう」

隊長は整列と一声、真一文字に並んだその速さたるもの、お客さんが来ている紹介する、早いが休憩入る。両腕握りこぶしを下げオッス。

本体は三十人、予備隊員十五名が休憩室に入って来る、わつと男臭さが漂う。

当番だろう四名がやかんから麦茶をコップに注ぎ始める。状況を見隊長は立ち上がった。皆に紹介する、こちらは鬼のデカ長と名高い元三鷹署の捜査課長、谷端一平さんでこちらのお嬢さんは柔術道北野流の使い手、村上真姫さんです。

隊員からおおっおと声が沸いた。

「お二方は皆に聞いてもらいたい声があるとお越し下さった、一平さんどうぞ」

照れ屋の一平は頭掻きながら立ち上がった、僅かしか入っておらんが順番に聞いてくれとICレコーダーを近くの隊員に渡した。一巡したが三人以外は聞いたことはないがと返ってきた。

隊長が君達は聞き覚えあるのかと正した。大木戸、鹿島、木島隊員等は浮かぬ顔で聞いた事があるようで無いようだと顔を見合わせている。

「何回でも聞いてみる、暴行事件の解決に結ぶ着くかもしれない」

「でも、隊長あるようでもないようでも」

「それは何時頃の事かはどうだ」

「最近ではないと想うが……」
と銘々にあやふやな返事。

「一平さんは寺島加奈に似ていないかと仰っているが、どうだ。大木戸、鹿島、木島、どうなんだ似ているかどうか」

三人は顔を見合わせると共に年上の大木戸が口を開いた。

「俺達独身組同年代、時には彼女と居酒屋にも行った、腰を据え飲みながら話す声に似ている様な似ていないような。それ以上は」

「今一と言った所だが、声に特徴とか他に」

「その声とは別だが、一昨年だったかな明るく元気は寺島さんには可笑しな表情をしていた時があった、満を期して退け時に聞いてみました、両親の事で会わねばならぬ人がいるんですとだけ」

「それは何時頃の事だ」

「あつそうだ、無断欠勤する前日だった。親想いな寺島さんの事、ご両親とゆっくりしているのかとその時は想っていました」

なんでそれを早く言わなかったんだと隊長。

「失踪事件に発展すると共に薄れてしまいました」

「ばかもん忘れる奴があるか、一平さんすまんそんな事があつたようだが」

「一昨年秋に失踪、同じしてコマドリで人目を憚るように補佐官と寺島加奈が密会。隊長、偶然と言うか時期が合い過ぎている、何かあるな」

「コマドリではどんな様子だった」

「二人とも口数少なく高級酒を飲んでいて、支払いは現金でお釣りはいらんとふら付く寺島加奈を抱くように出て行ったと」

「それ可笑しいな、ボトル一本ぐらいじゃー何ともない彼女」

「じゃー何でふら付いていた、考えられるのは薬物、でもコマドリの夕アちゃんはそんな事する人ではない、それでは誰が薬物を、補佐官が考えられるな」

寺島加奈さんはそいつに拉致されているのではとマキが言う。

「小生もそれを考えているが結論が見えない」

「寺島隊員は文武両道射撃だつてチョーが付くほどの使い手、その腕を見込んで軟禁状態ではなからうか、親想いを良い事に両親をちらつかせ盾にして、ましてや両親の事で呼び出されている」

「隊長の推理当たっているかも」

「一平さんならどうするこれから」

「高輪署の大泉刑事に極秘にピース王国大使館周辺を見張って頂いている。彼女の車は失踪と共に消えている、モスグリーンのBMWだ、合わせてお願いしてあります」

「一平さんにはいったい何人部下がいるんですか」

「小生は偽文屋であり部下はいない、居るとすればマキだけだ、あのキザ監察官も繋がっている筈だ、耳に入らん様気負つけねば」

「現役のデカ長さんそのものだね黒目が大きく動いたよ、私は何をすればいいかな」

「キザ監察官の動きに注意してくれ、それと監察官室のスタッフに年配の女性がいる、近づきコミュニケーションとって見てくれ、彼女も仲間だ」

「いやー一平さん本当に部下は何人いるんですか、一平流部下の扱い方をご披露願いませんか、私もそうだが隊員も聞きたいようだ、少し早いが昼飯にします、食堂の一角を特殊隊として用意しあります、そこでご教授願います」

隊長は返事も聞かぬまま隊員らと移動を始めた。一平もマキも後をつきざるを得ない、テーブルには大盛りカツ丼

が人数分用意されていた。

全員着席、隊長の声が響く、当番が頂きますと声を張り上げる。

「食べながらで構わんデカ長の心得を伝授して頂く、デカ長さんお願いします」

時ならぬ光景に早番の職員らもあつげにとられている、何時もながらの表情で一平は立った。ドーも人前で話すのが苦手で掻い摘んで話させて頂きますと前置きし始めた。

「二つあるその一、自分のCPUの中には市民の安全と真実が入っています、当然の任務と想っているそれには地道な捜査と忍耐にある。それで自分一人では解決出来るものではない、取り囲む大勢の方の協力があつてこそ、ただ単に命令を飛ばすだけでは士気半減も在り得る、捜査本部全員で個々の持ち味を出し合えばこそ解決に結びつく、指揮したならばその責は捜査員にあらず全て自分にある、失敗を恐れず自由にやらせた。そんな訳で皆の士気向上に努めた、一平流と言うか個々のくすぐったい所を突つき、コンマ以下でもいー、出せる状況作りに始終した」

先生質問がありますと大木戸隊員が挙手する、はいドーぞと一平。

「くすぐったい所を突つつけとは、男女個人差はあると想いますがそこを突つつかのしょうか」

隊長がキツと眼を剥いた。

「ばかたれ！黙って聞け、部下とは言え女刑事にそんなことしてみろ自分で自らの腕にわっぱを掛ける様なものだ」
一喝した。

「隊長さんそんなに怒らんでも、いつぞやの捜査課長定例会で言った事があります「部下のくすぐったい所を撥れ」と。とかく難しい活字が飛び交う定例会、異表とも言えるこの言を使わさせて頂いている。ととある課長さんが言つてた」

はい、分かりましたと大木戸隊員、でその方法は。又もや隊長が顔をしかめた。

「皆さんもいづれは部下を持つと想う否持つはずだそんな折、部下への心遣いを忘れずに。長い張り込みや聞き込み、で行き詰まった時、部下達は疲れ切っているが口には出さん、そこを突つつくんです、暑い日には冷たい物を飲みたがる

う、寒い日は暖ったかいものが欲しくなる。どうだい一息入れようとか交代しようとか、課長有難う助かった、ちよつとした事で士気は上がります。何やつてんだ、駄目だ犯人を早く挙げるばかりでは捜査本部に緊張もあるが負が多い、部下が何を望んでいるかを察知し相対する。時には居酒屋も、ラーメンだつて和洋問わず食べに連れて行つたつて悪くはない、晩度やるのは逆効果もある、よーは、部下の撥ぐつたい所を探すのも上司の務め」

「その二に行こう、雑談は兎も角事件を抱えていない時は、出来る限り署を離れ、捜査課を忘れ人と人との付き合いに徹すべし。遊び趣味の話も良からう。上下関係なく海山に出掛けても良い、居酒屋やカラオケだつていい、大いにコミュニケーションがとれ自然と話が進む、捜査中であつても連絡がスムーズに取り合えるようになる。聞き込みもそうだが相手に合わせる喋り方も一理ある、直ぐにとは言わんが心がけていれば語学堪能な隊員の皆さんが上司の暁にはいとも簡単に取り入れる事が出来ます、その二に付け加えるならば上目線で他人を見ない、以上です。どこかで想い出しその一その二を使つてくれたら小生幸せに思います」

どことなく拍手が起こる。

「一平さんは厳しい面も多いがいたつてフランク、硬軟自由に使い分けられるデカ長さんでした。今でも転落死に疑問を抱いて調査しています、一平流か協力者も九人程おり増える一方です、くすぐつたい場所を見つけては突つুক、ついそれにはまってしまう。とある署の役員付の年齢不明なお嬢さんもそうだ、上目線たつぷりなキャリアにうんざりしていた、かくかくしかじかです、キャリアの情報を入れて下さいと言つたら即情報が入り始める」

これからの任務に取り入れても悪くはないと隊長は言つた。

村上真姫さんは元デカ長さんのお供、助手をしていると言つていましたがどんな事をなさつていらっしゃるんですか、と若い隊員が聞いた。

「幼稚園に務める傍ら野鳥撮影やら北野流稽古指導に日々過ごしています、偶には巷でアルコールも、刑事の父っ様と一平の影響もあり事件を追っかけもする」

偶には巷でアルコールや刑事紛いには一平は渋い顔をしていた。

隊長が立ち上がり話し始めた。

「午後は柔術道北野流師範、村上眞姫さんと特殊隊選抜との親善試合を行う」

その言に皆呆気にとられている、一平だけがやつぱしと言った表情。

隊員はマキちゃんともっと話がしたい、でも北野流をこの目で見たい、マキは警視庁きつての特殊隊の面々と一戦交えたい、互いにくすぐったい所が見えた」

言い終わらぬうちに隊員はやったー、とばかり嬉しい限り。だがもうひと場所くすぐったい所がありますと一平が、例の三人が、何処かなと見回した。

「訓練終了後、マキと飲み交わしたいようだ、隊長そこだねくすぐったい所は」

さすが一平さんだ、そこまで見えなかった、終了後は静観している皆はすきにせいと隊長。

「隊長、小生は戻りながら二か所寄って行く所がある、マキは置いて行く頼んだぞ」

空中戦も見られる楽しみだと隊員はそわそわし始めた。

一平はごっさんし、マキ明日は幼稚園がある遅くならん様になと言いつち去った。

午後一時きっかり道場、やや端に寄り道着姿のマキがたつた。隊員らも遅ればせながら半円状に整列。

「只今より北野流の基本を披露して頂くマキちゃんお願いします」

握り拳の両腕を下げよっしゃーと一声、五輪体操選手の様な動きをし立ち上がる、鉄拳とけりの動作、後転横転も同様。低い気合いと共に走り出し壁を駆け上がり後転し構えに入る。いよいよ真髄であろう呼吸を整えている、うおーっと気合いかけ天井に飛び上がりる、逆さになり天井を蹴り竹刀掛けに仁王立ち、そこから前転で降り中腰で走り足払いの仕草。

隊員等は呆気にとらえられている。

よーしそこまで隊長が発した。

「マキ師範殿、いかようすればその動き出来るようになります」

隊長が言う。

「柔術道北野流は村上水軍の血を引いています、激しい潮流の中、舟から舟へ飛び移るのが日常、自然と足腰が鍛えられ三間ほど横跳びもいとも簡単、跳び上がりも同様。北野流はそれを改良して取り入れています」

跳べと言ったって簡単には出来んのではと隊長。

「立ったり座ったり今で言うスワット、毎日千回していました、いつしか塀に飛び上がれるようになり、枝にも天井にも、北野流のルーツはそこにあります」

「落伍者は出ないのか」

「出ます、父っ様なんぞ三日と持たなかったと聞いている。十人いて一人残ればいい方です、時代の流れ門弟がいなくなつては道場は閉鎖に追い込まれてしまいます。

その後は健康メニューで稽古し始めました。健康志向で門をくぐる人が多くなってきました、門弟も小学生から大学生、一般と多彩になりました」

「そりゃーきついよな毎日スワット千回とは」

でもとマキが言い始めた。

「何も北野流稽古が正しいのではない、ここにも特殊隊独自の訓練、稽古法があります。重装備で泥んこ沼で時には沈みし歩行などとてもじゃない」

でもマキちゃんと隊長が言う。

「忍者まがいな空中殺法も見せて頂いた、隊員等は啞然とした表情だった」

「北野流は下からの攻撃もあります、回転いや回転と言うより素早く転びながら相手の足元に近づき相手の急所

を蹴りあげる、前転し立ち上がりながら顎をヒットさせる又、相手の力をも利用します」

とマキが説明する。

「実践願えるかな」

「いいとも、どなとでも」

了解と隊長は言い休憩を入れる十分後に集合を告げる。

今年入隊した研修隊員の中から三人を選びマキ脇に整列させる、皆空手の有段者だ。こんな娘に大の男が三人ではと不服そうな表情、一本勝負はじめ！。

一人が胸倉を掴まえんとした、軽く払いのけ回転しながらのけりがこめかみを掠った、互い腰を屈め見合ったまま横に動き、満を期して気合いともども脚先がマキの顔面に、横っ跳びで交わす、必要に攻めて来るが難なくマキはかわした。鉄拳が顔面に襲い掛かる、同じして一人が足払いを掛けて来た、畳を蹴りながら鉄拳を右手で打ち下ろし頭上に舞う。相手二人はキョトンとする、空中にいたマキは二人の肩に降りた。あと一人残っている、隊長は勝負ありを告げない。

残った一人は六尺五寸の大隊員、マキはその男を気にしつつ畳に降りる、前で二人と向き合い構える、いまだー、隊長の声で大男は背後からマキを首締め固め。

隊長の参ったかの問いに歯を食いしばり首を僅かながら横に振った、隊長は手を振り下ろした、左右にいた隊員二人はマキ目掛けて足蹴り、可哀そうと隊員らは、だが次の瞬間おおーと口々に。

足が動き始めると同時にマキは大男の頭へ両腕を回し素早く腹筋した、背後に回転し有段者の蹴りがマキを霞め大隊員の胸倉に、有段者二人の蹴りを食ってはひとたまりもない、が、何のこれしきと仁王立ちする、マキが後頭部に空回転蹴り、すると大隊員は畳にどっさつと倒れ込んだ。

勝負ありと隊長が叫ぶ。

「次は誰だ、マキちゃんの相手をするものは」

道場はしーんとする。

「その隊員を手当をしてやってくれ、マキちゃんとの一戦はこれで終わりにしよう、閉場時間まで自由時間とする、マキちゃんと駄弁リングも構わん時間まで自由に、大木戸隊員等三人こっちにこい」

三人は終わったとは言えこれから相対せとでもと襲る襲う隊長の傍に行く、これは今宵の軍資金の一部にと福田さんを差し出した。

「ホッとするとともに、たっ隊長、俺達のくすぐつたい所を良く御存じで」

「ばつかたれ、それよりも柔術だけでなくアルコールもめつぼう強へーぞ、阻喪のないように」

「了解、今宵の任務三人が確と承知いたしました」

隊長はこやつらはと苦笑い。

「マキちゃんの柔術北野流は素晴らしいもんだ、不明な寺島隊員でも敵わんのでは」

「彼女は空手二段、剣道初段の持ち主、戦わずしては分らん」

口には出さなかったが、負けるんではとの想いがマキの胸中に。

「寺島隊員が早く出て来てマキちゃんとの一戦を見たい」

「一平が関連している事件で調査している、近いうちに彼女の所在が分かるかも」

マキは言う。

「悪りー奴らに巻き込まれていなければいいんだが、彼女を敵に回したら大変だよ、射撃だつて特殊隊一、二の腕前だ」

隊長は顔を曇らせ言う。

「一平の今迄の調査では彼女はやむを得ず悪の手先にされているしか考えられん」

・・・マキちゃん今日はありがとう、隊員等に興奮剤を注入して貰った、時間だ解散します。やつら三人を宜しく、それではタマには遊びに来て下さいと言って隊長は道場から去った。

メトロ銀座駅を四人は出た、三人のリーダー格だろう大木戸隊員がマキちゃんこっちだ、三分で着くと案内始めた。レトロ調な造りが見えて来たここだ、入ろうと皆を招く、中は漁師溜り場の様な雰囲気、大部屋に大小テーブルが所狭しと置いてある。まだ時間が早いせいか店員さんが大木戸隊員を見つけどこでもどうぞと、四人用だろう真っ角テーブルに陣取った。

「ここは静岡の漁港と直結な店、新鮮な魚介類は豊富、先ずは盛り合わせとサクラエビのパリパリ揚げを注文、続いてジョッキと言いたい所だが今日は升酒でいきたい」

マキちゃんと顔を見た、オツケーサイン。肴より先に四隅に塩が乗った升酒が来た、カンパイ。

「ここは一級品は置いてないが庶民派の店リーズナブルだ、マキちゃんジャンジャン飲んで食べて」

「マイペースでいかせて下さい、ハイペースじゃ敵わないよ」

「おーごめん、それもそうだ強いからって、ハイペースでは俺も参ってしまう」

「でも隊長さん、部下さんを良く知っていますね」

「訓練稽古は厳しいが場を離れば上官と言うより一人の先輩になり決して上目線などしない、おいこのアプリどうすれば良いんだとか気さくに話してくる」

「それが上司たる条件だ、皆さんは幸せ者ですな良い上官で、話は変わるがコーヒーは飲む」

「缶コーヒー、インスタントコーヒーはよく飲みます」

「サイホンコーヒーの凝っている店知ってる、ここからは少し遠いがよかつたら教えますが」

「教えて下さい、マキちゃんの知ってる店ならなお更です」

「調布市に深大寺があるの知っていますでしょ、参道傍で一平の奥様がコーヒーショップ開いています。客層は近隣所轄

の刑事や警察官が多い、若い総務課職員や女性警察官も良く見えます、一度いらしてみても、週に一遍八時十五分から三十分間、現役CAによる歌謡ショーもあります。升酒も良いけどコーヒー飲みながら聞くのも癒したつぶり感です」

「一平さんの奥さんが行く行く、五時には業務は終わるシャワー浴び着替えても七時半には着ける」
マキは皆と会えるのを楽しみにしているとマイペースで飲み食べた。

・・・その後も世間話に花が。八時ちよい前に四人は再会を約束してお開きとなった。

一平は本庁を出た所で大さんに電話を入れた。

「本庁にいるんだが都合つけば会いたいんだがどーだろう」

「とっかかりの書類を仕上げてからなら時間取れるよ」

「どのくらいかかるかな」

「後三十分もあれば終わると思う」

「よっしゃー、以前使ったレストラン白金でどーだい、先に言って待っているが」

「了解しました。待たせんように努力する、じゃー後ほど」

白金台駅を降り目黒通りを下った、左手にピース王国大使館が入ったマンションが見えて来た、道路を挟んだ反対側の歩道で一平は腕組みをし見上げている。

マンションさん教えてくれ、これから何が起きようとしているんだ、寺島隊員はどこにいるんだ、と独り言のようにブツブツと語り掛けている。

レストラン白金に向かい始めた、前方から見た様なアラフォー女性が、彼女も一平を見つけあれつとした表情、近づくにつれ記憶が戻った海老原幸子さんだ。さっちゃんと手を挙げたら一平さんと返してきた。

「どちらら行つた否行くんですか」

と海老原幸子は聞いて来た。

「駅近くのレストランで待ち合わせをしているんです、時間があつたのでブラブラしていたところですよ」

「宜しかったらご一緒させて頂きませんか、今日ひいたら電話するつもりでした諸々の一件で」

「まだ業務中では」

「今郵便局に行ってきた所です、仕事を熟せば意外と自由になれます。電話入れますからちよつと待ってて」

と海老原幸子は言い、同僚にケーキ買って帰るからねと電話していた。

「同僚さんもキャリアアウーマンさんには勝てんようですよ」

「そんな事ないよ、皆もそれなりに使っています」

まーいいさ、おぉーその店だと一平、窓側に陣取った。

待ったかいと大さんが入って来た、松ちゃんも一緒だ。いつ見てもいいコンビと言うか対照的な二人だ、大さんは厳つい顔にその筋のような服装、松ちゃんはイケメンでカジュアルウエアだ、さっちゃんに二人を紹介し、二人にピース王国の事務官海老原幸子さんであり良き協力者ですと紹介した。

「心大きい人には人は集まると聞くが、一平さんは計り知れない心を持ち大きい人ですね、このような綺麗な方を協力者に行っているなんて、本庁のキャリア付のバァーさんとしての間にやら」

「大さん、その位にしといて本題に入ろう、例の垂れ込み電話は失踪中の寺島隊員と暫定ではあるが小生は決めた。電話の内容から監禁いや軟禁状態に置かれていると判断、自由は効くが逃げ出せない状況下にある、それで失踪先と言うか軟禁場所はどこかだ」

「一平さんはこの界限ではなからうかと見ているのでは」

「その通り、乗っていたモスグリーンのBMWも消えた、陸運事務所では廃車されていないと言う」

「その車もこの界限」

「話が早い、これ等の写真は学生時代と特殊隊の頃だ、オフ日や手空きの時にでも大使館当たり一帯をそれとなく彼女を車を探って頂きた、小生も鳥撮りは休み、ここに足を運ぶようにする。松ちゃん、マキにも来させるようにする、宜しく」

「さつきも仰ってたが一平さんと言う人は、人を湧き出す力を持っている人柄なんですね、元デカ長とは言え今は一市民、現役さんに指示出せるなんてそんじょそこいらにはいませんよ」

とさつきちゃんは言った。

「海老原さんとやら、現役は去ったとは言え刑事魂は抜けてはいない、デカ長が言う市民の安全と真実追及にありだ、縦割り行政ゆえリスクも多い、上司と衝突も番度だがそんなのどこ吹く風、一平流捜査は続き百パーセント解決、そんな所にわしら二人は惚れ込んでしまい、今日に至っている。海老原さんもそうでは」

「はいそうです、初対面の時は元デカ長と聞いていました、チョー堅物ではと想っていました、ところが穏やかそのもの人がほんとに刑事さんと想えるほどでした。いきなり酒は飲めるかと聞いて来ました」

「で、どうなさいました」

「自然に、はい飲めますと答えてしまった」

「海老原さんもそうでしたか、自然に相手を引き付けてしまうんだよな一平さんは」

「取り巻く方々もそういう人ばかりでした」

酒談議や世間話に花が咲き続く、ところでと大さんが一平に言った。

「リスク、危険も多いよ一平さん、マキちゃんだってあんな目に合ったりしているんだ」

「マキもマキ流に与えられた使命と日々過ごしている、小生は余計な事は言わんよーにしている」と一平が言った。

「さつきちゃん、先程小生に何か言いたい事があると言っていたが」

あつ、いけない、そうだったとコーヒーを一口し実はと話し始めた。

「今年入った大河原健三君の事です、一平さんに言われたように深入りはせずに仕事を熟せ、と言ってから数字は追わないようでした。所が浮かぬ顔している事が多くなりました、しかし補佐官との国王来日準備も和気あいあいと進めている、私の思い過しかと想っていた矢先、彼のディスクでとんでもない物を見つけてしまったのです」

「さっちゃん宛ての恋文でも見つけてしまったのかい、今年年の差や年上だつて可笑しくない、小生とこを見るよ、幾つ違いだと思うんだ」

「あらー、嫌だそうじゃないのよ」

「そーじゃーなけりゃー何なんだ」

「ディスクに載っていた彼用のメモ書きノート、私もそうだが日付順に記入している。国王来日準備委員会のメモが多い、電話のやり取りも欠かさず記入している。本国から委員会へ直接入って来る事もしばし、その場で電話をとれるものがとるようにしています」

「自然としているしか想えんが」

「午前中彼が頻りとメモを見、末尾の方へ何やら記入していた。仕事熱心だなと私も見習わならくちやと想いました。補佐官に呼ばれそのままにして彼が席を立った時、見ちゃいました、驚きのメモ書きを。

・度々使途不明金がS・Aへ

・相谷？と頻繁に電話

・射撃上手な女拉致・・・

・本国ラルフ中島より日に二回以上電話、逆も

・偽造パスポート

「どう一平さん興味あるでしょう」

「大ありだ、後は何か」

「ジュワーツと手に汗が出て来るようでした」

・儲け主義のラルフ中島と国民派の国王タッカー大町は不仲

・補佐官と相谷？は繋がっている

・シャルム一等書記官と白家補佐官も繋がっている

・ランソン駐日大使は孤立状態

ここで彼が帰って来るような気配だったので日にちまでは確認できなかったが

このままだと大河原健三さんが危ないなと一平。

「大丈夫、私がかつちり手綱を持っているから暴走できないよ」

「手綱を振り払う事だつてあるよ、大さん射撃上手な女とは寺島加奈なのは」

「想いたくはないがその様でもあるな、ましてや拉致とは穏やかでない、日付は」

と大さんがさっちゃんに聞いた。

「先にも言ったように僅かな時間だったのでこれが精一杯」

「ありがとう大いに役にたつ、欲を言う機会があったなら写真撮つといてくれ、彼はまだ相谷が誰であるかは知らない様だ」

「寺島隊員を拉致したとなると何処に監禁しているか否軟禁か、どつちにしろ補佐官と監察官の目の届く所にいるんであろう」

大さんが言う。

「モスグリーンのBMWは廃車はされていない、その車もどこかに隠してあるに違いない、それも探さんとな、シャッター付きの車庫にでもしまつてあるに違いない、さっちゃんもそれとなく気いつけてて」

「はい分かりました、監察官の元情報屋二人も」

一平はさっちゃんの話の話を聞いてから大さんに向き直り言った。

「偽旅券はどー判断したらいいかな」

「逃亡用だろう、或いは身隠し等、必要な時に出て来る事も、現在寺島隊員が濃いな、武道とさっきも言った通り射撃の名手だ、その腕を見込んでシャルム一等書記官が何か悪巧みでも」

「小生、考えたくはないが脳裏にはそれらしき事も」

「駐日大使と表面上は仲睦まじきだが一等書記官と補佐官の腹の中には何があるのか、私達にも計り知れないものが、彼のメモを見た限りでは、それらしき事があるしもなかれ」

とさっちゃんは言い一平を見た。

「これからの捜査はコンマ以下の可能性の攻防と忍耐が不可欠。壊れかけたCPUにも養生が必要だ今宵、一献傾けよう、六時にコマドリで時間まで小生は大使館辺りをブラついて来る、さっちゃんは戻り業務の続きを大さんと松ちゃんに任せる」

「俺達もブラついて来るか」

仕事が残っているので一先ず戻ります、後ほどと言いついコーヒーを飲みさっちゃんは立ち去る。

重い無垢扉を押し中に入った。

一平さん、いらっしやい、とタアちゃんがチョースリットの入ったチャイナドレスで迎える。

「後三人来る、テーブルはどこでいいかな」

「既にお一人様お出ですすよ、あちらの席です、今お手洗いをお使いになさっています、寶もありキャリアアウーマンと言ったお方ですね、どこでお知り合いに」

「この店は初めてだったな小生等の仲間です」

「あーら、そーおー」

「何だ、その意味深な受け答えは」

一平さん、遅れてすまんと大さん等が入って来た。

「ほーら言った通りだろう仲間だ」

場が悪くなったか肴作るわねとタアちゃんはカウンター内に引っ込んだ。

ブラウスにカーディガンを羽織り、薄いグリーンのスカツチョのさっちゃんが現れた。大さん等は私服姿のさっちゃんは初めてだ、眼をぱちくりさせた。

さー揃った、カンパイだ何にすると一平は皆に聞いた。

「レミーマルタンと行きたいが乾杯は生でいこう、タアちゃん頼むよ」

器用にジョッキ四つ持ちテーブルに置いた、大さんは見届けると乾杯の音頭を買って出る。

「さっちゃんはファッションも中々どうして別人かと想ったよ」

「あら御上手、大さんだつてその筋の様な着こなし方、乙ですよ」

「うちの課じゃーこの顔にこのシャツ、この上下では間違えられると煩くつてしょうがない」

「いいですよ、あつていますよ私好みかも」

「うちの母ちゃんも言ってくれない、初対面の人にそう言ってくれると嬉しくて」

一平と松ちゃんは想わず顔を見合わせ苦笑いしてしまった。

大さんとさっちゃん、二人ともどうしたんだと言った表情、四人はその後、例の一件からかけ離れた話に花が咲き続けた。

これと言って進展がないまま七月に入った。情報屋田川と室井は見かけはするが動きがない。一平は相も変わらず白金一帯を歩き回っている。今日はマキが同行している、レストラン白金で休息に入った。コーヒーだけじゃなく他の

ものもとマキが言う。

「他の物って何だい」

「何時もコーヒーだけでもん、ケーキとかワツサンと一緒にたのもうよ」

「何だいそのワツサンとか言う代物は」

「たのんでみれば分かる、それ注文するよ」

「小生にも食えるだろうな・・・」

マキがオーダーし始めるとルパン三世が喚き始めた。大泉だと唖れ声が。

「今日も白金にいるのかい、居るならば直ぐ合流しよう、確かとは言えないが情報がある」

「例の所でコーヒー飲んでる」

「おー、そうかい二人で直ぐ行く」

マキは察したか其々を二人分追加した。

お待ちどうさんと大さん達が入って来た、間もなく梅雨も明けると言うのに上着を着込み例のスタイル、そのかし暑さは隠せない、顔には大粒の汗。

「即本題から話そう、白石補佐官は高級車アイボリーのジャガーx6を所有している」

「大使館員の補佐官なら持っていないでも不思議ではないのでは」

「まー一平さん聞いてくれ、二回ばかり彼の運転で出入りを見かけている、一回は後部席はスモークが貼ってあるので乗客がいたかは不明だった、問題は二回目だ、昨日業務終了してからだろう、六時過ぎ彼の車が出て来た、驚かなくてれ助手席に寺島隊員似の女が乗っていたんだ、トレードマークのガングロではなくおまけに深めな帽子にサングラスにマスク姿だが俺の眼に狂いはない、彼女に間違いない、咄嗟に尾行をだがタクシーが来んのよ、無念としか言い様ない」

「寺島隊員は彼らの手にある事は間違いないな」

「ナンバー照会したら白石補佐官個人の所有で住所は大使館のあるビルの八階、車庫証明は地下二階でした」

「寺島隊員は週末には海外に行つてまでも日焼けに努めていた、失踪いや拉致されてからは一度も行っていないとすれば普通の肌色になつていても不思議ではない」

「補佐官に揺さぶり掛けてみますか例えば事情聴取とか」

「大さん、揺さぶりも選択肢の一つかもしれないが前にも言ったが危険が大きすぎる、相手は大使館だ、あの監察官も出て来る、知らぬ存ぜぬと言われればそれまでだ」

ここまで分かつていながら今後どう動けばいいんだと大さんは言う。

「現在はシャルム一等書記官、白家補佐官、相谷監察官、情報屋の二人、本国の反国王派のラリフ中島、それに寺島隊員は繋つている。小生の感と言うか何か事を起こそうとしている。大さん、小生を信じてくれ分かつてくれ。もっと情報を得ると共にその日を待つてくれ。不服も募り寄るだろうが確信を掴んでから一発勝負に出る、いわばマトリ方式だ、その日が早く来るよう小生は誰よりも願っている、大さん、分つてくれ」

「失敗は自滅、一平さんは噂通り解決百パーセントだな、これからも宜しく」

大さんはそう言いワツサンを神妙な顔付きで食しコーヒーを飲み始める。要約席に和が見えた、マキと松ちゃんもワツサンとコーヒーに手を付け始める。

梅雨も明け近隣でも煙火大会が、マキが行こうよと迫る。

「混んでいるし早くから場所取りもしなければならぬ遠慮しとくよ」

「指定席があるの知らないの、購入して時間になつたらその席へ行けばいいだけ、行こうよ」

「指定席券購入しなければならぬのでは」

「ブブー、もう売り切れています」

「じゃーどーするんだ、遠くで見るのかい」

「ブブブー、もう買ってある、電車は混むけど後は時間になったら行くだけ、四人一テーブルだったのでのりちゃんに誰かいないと聞いた、CA仲間の松坂里英さんがオツケー返事、住まいは吉祥寺だしアルコールも程々いける。そんな訳で自分とCAさん二人と一平だ、若き女性に囲まれて嬉しいでしょう」

「そりゃー嬉しくないとは言えない、だけどそのメンバー、煙火大会どころでは無く飲み大会になってしまうのでは」
「それは当日になってみないと分かんないけれど」

かくして四人は布田駅改札出た所で待ち合わせと相成った。トップはマキだ、のりが里英ちゃんを連れて現れ遅れさせながら一平が加わった。会場までは徒歩で二十分、大勢が会場へ向かう、四人も迷うなど言い合い流れに加わった。会場に開始三十分前に到着、陽は多少残っている、テーブル席は難なく探せた。荷物番しててね、マキは飲み物と肴を仕入れて来るねと二人を誘い出かけた。開始十五分前を告げるアナウンスが流れる、只今と皆両手に大袋を下げて戻ってきた。

「さー煙火大会さんに乾杯しよう」

テーブルに着とビールを並べ音頭をとった、マキは完全に指導権を握っている。

「一平さんとマキちゃんは初めてでしょう改めて紹介します、自分と同期のCA松坂里英、りえちゃんです宜しくね」
のりが紹介を始めた。

「初めまして松坂里英です、こちらが何時ものりが言っているデカ長さんでこちらは北野流の使い手村上真姫さんです、ね、宜しくお願ひします」

「あつう、りえそれ怒られる、一平さんにマキちゃんでもいいよ」

「はい、りえちゃん一平です、煙火大会は楽しくなりそーだ」

缶ビールをカチンと合わせた。

デカ長さん、呑嚙に聞いた一平さんと花火見物なんて最高、今宵酔っちゃおうかなと松坂里英。

「酔っても良いよ皆優しいんだから、送ってくれるよ」

とのりが言う。

「マキ、どー見たって缶ビール一本づつじゃー足んないのでは」

「のりちゃんとりえちちゃんがレミーマルタン差し入れしてくれたよ、グラスは自分が持って来ました」

「うっひゃー最高だ」

一平はもろ手を挙げて喜んだ。

「常日頃のりが、デカ長さん否一平さんはレミーマルタン愛飲していると聞いていました」

そーこーしていたらズドンと発射音がしスターマインが炸裂。

拍手と歓声が上がる、煙火大会は開始された。のりが空き缶を起用に潰しビニール袋にしまおう、徐にレミーマルタンをテーブルに、すかさずマキがグラスを取り出した。

「りえちゃん、お願い注いで」

とマキが言う、はい、よっしゃーと返事。

手慣れた手つきで四つのグラスに注いだ。のりの返事はチームいっぶく風、皆飲み煙火を見、タコ焼きにお好み焼き、ソーセージ、ケバフ、ホットドックetcと忙しい。

十九時三十五分頃、各地の煙火大会でもよく行っている花火と音楽のコラボがここでも取り入れている、二回目が始まった、色とりどりの花火が音楽に合わせて打ちあがる、ファイナルが近づいた、単発速射され八号玉が炸裂、ここかしこから発射音が響き芯割、八重芯、銀冠等が続き十九時五十分拍手と歓声を持って八千五百発は打ち終わった。

「一平、自分等はこれから瀬祭飲みに行くよ一緒に行く」

とマキが話しかけた。

「小生は寝る時間が迫ってきた帰るとする」

「はい、じゃー三人で行って来ます」

「行きたつて何処だ、ここからだとしたらひよつとしてあそこか」

「そうあそこよ」

「伊豆諸島朝獲り魚の店だろう、予約なしには入れんぞ」

「入れるもん、ネット予約完了している」

「高っけーぞ」

「高くないもん、レミーマルタンのお返しに一平のカード貸してくればいいじゃん」

そんなやり取りを目の当りにするのりとりえはきよとーんとする。

「つたつくもー、飲み過ぎんなよ明日があるのを忘れんな」

「おあいにく様、明日は日曜日、のりちゃんとりえちゃんはオフ日です、自分も休み」

又もや一平はモーと唸った。

「だから好きよ御馳走さま」

と三人は礼を述べた。ゴミの片付けして出よう、明るく人道りの多い道を選ぶ事、はいとする返事を聞き先に一平は席を立ち皆を促した。人人が続く、半ば道いっぱいには広がる人波、布田駅を過ぎるとそれが嘘のように消えた。そのまま進み甲州街道旧道交差点に出た、楽しかった煙火大会、有難うございましたと言いまき達は左に曲がった。さつきも言った通り飲み過ぎんなよと手を挙げ、小生は徒歩でまつづぐ深大寺目指した。三鷹通り野川を渡った所で左に曲がり深大寺城跡西側方向に歩を進める、虎狛神社脇を抜け須街道に出てFマートを右折、深大寺天然温泉湯けむりの里の前を通った。その先で右に曲がり舗装はされているが狭い上り坂を登り下った、深大寺通りに出た。

Fマートからは暗いし道幅の狭い所もありこの時間の人通りは皆無、一平の背後で黒影がチラついていた、歩速を変

えれど付かず離れず、深大寺通りを左に曲がる、背後でチラついていた黒影は何時しか消えていた。

まりが後片付けしているんだろう、時間外だがいっぶくの明かりが付いているのが見えて来た。ただいまといっぶくに入った。

「お帰り、終わってからマキちゃんと飲みに行ったんじゃーなかったの」

「癩祭飲みに行った、小生抜きでな」

「それは残念でしたね」

「あの勢いのある三人の中には入れなかった」

「一平にもそんな事あるの」

「大ありだよ、のりがCA仲間を一人連れて来てレミーマルタンで乾杯始めた」

「良かったじゃないの女性に囲まれて」

「小生、チビリチビリやが仲間に入れてもらった、だけんど煙火見物どころではない、一時間たたん内空にしてしまった、煙火も終わり飲みなおしに癩祭だと例の店に行ってしまった」

「マキちゃん主導の煙火見物、仕方ないではないか」

「まーいいんだけど別れ際にレミーマルタンのお返しにカード貸せつてと言うんだ」

「何時もの事ですよ、良いんでは」

「帰路、背後で黒影がチラリチラリ、気付かれんよう曲がり際で背後を、帽子を被り黒尽くめ、男いや女だったかも知れない、狭い上り坂当たりでひよつとしたらと歩き身構えていた、が深大寺通りに出た時には見えなくなっていた。ま、り、どー想う」

「想い過ぎじゃーないの深大寺には歩いてくる人もいると聞いています、近隣の人が駅から歩いて来たとも考えられる、偶々同時期同方向に歩いていただけでは」

「そーであればいいんだが、さっきも言ったように女の様でもあった、もし女であつたら昼間は兎も角夜に車も通らん暗い道を歩くだろうか」

「そう言うけど何もなかったんでしょ。朝刊に深大寺で昨夜殺人事件がありましたとでも載ると言い張るんですか、それより大さんがいらっしてくれました、何か用事があつたんではないのか煙火見物に行っていますと伝え電話でもしたらと言つたんですが、急用ではないが伝えたい事があつたので寄ってみた、明日朝に電話入れると言つといてくれ、難しいながらコーヒーを飲んでいました。明日電話してね、とづくに寝る時間が過ぎていきます」

一平は肯き二階へ上がった、シャワーを浴び日課の一つレミーマルタンをグラスに注いだ。

朝散が終わり朝食の為まりと向き合っている、具沢山のみそ汁に柳葉魚にキュウリとナスのヌカ付けが並んでいる、柳葉魚は本場物を食ってくれと北海道に嫁いだ娘が送ってきたものだ。

まりが言った、そしてこれは美味いと一平。

「入り口に臨時休業しますと張り紙があつたが今日は」

「一平ったら忘れたの、今日いっぶくが休みなのを」

窓越しに外を見ながらはてなーと箸を置いた。

「今日は私の中学校時代の同級会ですよ」

幾分声に力籠めてまりが言った。

「無理ないよね、一市民が警察官僚を大使館を相手に立ち向かい真実追及だもんね」

「いやはーごめん」

「忘れていたとしてもどうしても良い事、それよりも生身は一つだからね忘れないで、マキちゃんだつてあんな目に合っているから」

「分かつてはいるんだが小生の中のもー一人の小生が、真実を早く突き止めろと壊れかけてきたCPUを突つつき回す

んだ」

「一平と私ははいつでも良いとは言わない、が、性分は分かり切っている、周りの人を巻き込まないようにして、現に昨夜の皆さん、可成り突っ込んでいるんじゃない、あの表情からすると、秘密裏に動いているのが上司にでも知れたんじゃないの、更迭でもされたら」

「皆さんだつて松ちゃんも重々承知上、へまはせん、小生だつて誰構わず頼みはせん」
「ならいいんだけど」

まりの安心し浮かべる顔を見届け残り一匹を口に放り込んだ。

何気なしにブリキの脚立に置いたガラケイが喚き始めた、時ならぬ音にまりが負けじと喚いた。

「何で脚立に置くのよびっくりするじゃん、早く出てよ」

「すまん、小生もびっくりしたぜ、皆さんからだ、おつはよーさーあん いつ一平です」

「おはようございます、今朝何かあったのかいその口調は」

「いやー申し訳ない、ブリキの上に置いといたガラケイがルパン三世と共に喚いたんだ」

「朝のひと時一平さんらしいな、怒ると言うかユーモアと言うかまりさんの顔が浮かんでくるぜ」

「何時もの事だ面目ねー、ところで皆さん小生に何か用事が昨夜は留守にして申し訳なかった」

「構わんよアポ無しだ、煙火はどうでした」

「まじかで観る煙火は迫力がある、腹の底まで響いてくる、それより何か小生に」

「電話では何だ、そっちに行つて話す時間はあるかな」

「大丈夫だけどいっぶくは臨時休業、場所を変えんな」

「昨夜店の張り紙で知っている、深大寺ソバとやらを食しながらでは」

「いいとも、参道入口にバス折り返し場があるそこに十一時半では」

了解、ではその時間にと行って大さんは切った。

一平今日、どんな出で立ちが良いと想うとまりが問い掛けた。

「アラヒイフに相応しい服装がベターやないか」

「それってどんな」

「小生はVANジャケット羽織るかもせんがまりにヤー何がいいか想いつかんよ」

「破れG—ンズに半袖で薄手のタータンチェックで行こうと想っているんですが」

「まりがよけりヤーそれにしたら」

「今流行りのガウチヨパンツやスカーチヨも選択肢に入っていますが」

「小生には分からんよ、マキの様に布切れだけはよしてくれよな」

「そんな事言つてマキちゃんに怒られるよ、それだつて夏のファッションだからね」

まー好きにせいと、言い一平はお茶を飲み洗面所に。

歯磨きを済ませた、待ち合わせには時間があるとロッキングチェアに腰を落とし新聞を広げた。ポケモンgoが上陸にと目が止まった、ポケモン探しに夢中になり事故も多いと記されている、が小生もとばかりにダウンロードを始めた。幸か不幸か、どこで手違いしたか失敗、再度挑戦するも結果は無念続き。

「何をアツアツ言つてんの」

と、そろそろ出かけるからとスカーチヨにボタニカル柄のシャツ姿のまりが出て来た。

「何でもねー、ポケモンが出てこねーんだ、基本さえ守れば事故もなく楽しめるんだが」

「あーそれね、昨夜調布署の婦警さん達がやつてたよ聞いてみたら、昨夜のいっぷくそれで盛り上がりばなし、中学生でもダウンロード簡単に出来ると言つてたよ」

「だまらっしゃい、小生に不可能はない、今に見とれ！、それよりもマキの布切れをくつつけた様な衣装とは違い布切れ

が余っている、そのだぶんだぶんのスカートかズボンだか分からんもんそれはなんだ」

「仲の良かったクラスメートがこれでいく、自分一人では……まりも着て来てつて、さつきラインが入ったの、このブラウスも決まってるでしょう、今秋流行ると噂されているボタニカル柄よ」

と言いつその場回りした。

「本人が良しとすれば良いだろう、今の小生には流行りもんは分からん、遅れん様に行ったら」
はーいと返事し帰りは何時になるか分からないと言いつ残り階下に。

少し早めだが大さんとの待ち合わせ場所に向かった、縁も多いが日向ではジュワーツと汗が出て来る、深大寺通りから山門に通ずる両側はソバ処が軒を連ねている、手前左側に鬼太郎茶屋が、夏休みなのか中学生で溢れている、小生も仲間に入る、ブロンズ風の鬼太郎が目留まってしまう衝動買いだ。

待ち合わせ場所に戻ったら大さんが日蔭を探し佇んでいる、手を挙げた、大さんも気づき手を挙げ返してきた。

「すまん待ったかい、そこで買ってしまった」

一平は鬼太郎を見せた。

「好きだな車にバイクに飛行機、今度は鬼太郎かい」

幾つになっても好きなのは好きや、いっぶくの棚が足なくなってしまうと言いつながら山門方向に、大さんを案内し山門下で左に曲がった、百メートル行つた所の木立の中に小堂が立って居る、深沙大王が祀られていると言いつ登りの小道を行く、登り切つた所で深山茶屋が見えた。

「大さんここだよ下の喧騒した所とは違い、林の中の一件茶屋、造りは簡素だが中々どーして」

おー、一平さんラッシュイと若主人の声、奥の座敷が空いておりますこちらにどうぞ、主人は開き雨戸をあけ格子柄の座布団を用意した、扇風機はついていますが暑かったら障子を開けて下さい、お決まりましたら呼んで下さいと言いつお茶と品書きを置いていった。

「一平、今どこにいのよ」

とマキから電話が入った。

「大さんと深代ソバ喰いに来ている」

「自分達もすぐ行く湧水それとも深山どっち」

「深山だが自分達って誰だ」

「のりちゃんとりえちゃんだよ、今起きた所、昨晚は煙火見物打ち上げと称し獺祭飲んでいたら閉店なっちゃった、板さんが片付け終わるまでいいよ、と言い残りもんだけど黒豚出してくれた、お言葉に甘えていたら日付が変わってしまった」

「つつたくもー牛じゃーないけどもーいい加減にしろ、あとの二人はどうしたんだ」

「遅いからと我家に泊まって頂きました」

「遅いじゃーなく早すぎる朝だろう、捜査課長に怒られただろう」

「怒るところか風呂沸いているから入りなと言ってくれた」

「ほっほー課長もいとこあるではないか」

「で、三人でYYし今起きた所、直ぐ行く待ってて」

「・・・相分った、深山で待っている」

大さんお聞きの通りだ、十分もすりゃー来る、その間で済むならお聞きするがと一平。

「構わんよ、一平さんもマキちゃんには敵わんようだな」

一平はそれを聞き帳場に後三人来る、それから注文すると声を掛けた。

「あれでも小生の良き協力者の一人だ」

「一平さんは幸せもんだよ俺の周りは害虫をかみつぶした様な奴ばかり、攻めての救いは松宮のあどけない表情だけ

だ。一平さん掻い摘んで話そう、あのキザ監察官は一平さん達の存在を知ったようだ、キザ野郎は何をしでかすか分からん、事実マキちゃんは襲われた。思うに前に立ちはだかる者は消そうとしている、気負つけてくれよな」

「大さんありがとう、小生やまりは想定内だ」

「そんでよー、監察官室付けの例のおぼちゃん、お昼でも一緒にいかがと来たんだよ、セクハラになってしまふかなと年齢不明なお嬢さん、女に変わりはないと昼飯を一緒にとったんだ、相も変わらず監察官の愚痴の山」

「見直したよ大さんも良いところあるじゃん、愚痴の聞き手に回るなんて」

「パイプタバコはぶかぶか、カスは灰皿が置いてあるのにわざわざごみ箱に行つて捨てたり、どうしようもないよと愚痴っ放し、直そうとの言葉はキザ監察官には死語か、拍車が掛かる上目線に職権乱用」

「やりそうな事だな」

一平さん、上手く説明できんがと大さんは向き直った。

「マル秘事項らしき場合、第三者が居た時には聞こえんよう話すのが常だと思うが」

「小生もそーすると思うが」

「あのアホ監察官、最近はおぼちゃんがいるのに平気でマル秘紛いの事を電話で話す様になつたと、電話を切ると我に返つたかバアーさん今のは聞かなかつた事にしてくれと、最近は興奮気味に電話をする事もしばしと言っていた、興奮気味では誰が居ようが関係ないよな」

「マキの前でも聞かれては困るような事は自然と小声になってしまう」

「それが本来の姿と想う、金が足らなくなった至急書類便でおくれとか、あの女の腕は確かだとか井の頭ではへまやらかしたな。バアーさんは何の事だか分からんではいるが興奮気味に話してたと、一平さんこれって」

「そーだそれだよ」

「相手は分からんがキスゲ橋の件とか、元デカの谷端一平が文屋と称し探り始めている、気負つける。とか一平さん

が睨んだ通りキザ監察官が絡んでいる」

大さんは任意同行も視野に入れて、しよつ引いてもいいぜと一平の顔を見た。

「以前にも言ったかしれんが危険だ、悪知恵を働かせ職権を使い揉み消されられ大さんは更迭もんだ、現在小生はどー立ち向かったらいいかといった所だ、府中署交通課の稲垣巡查長もキザ監察官に眼を付けている、刑事課に任意同行を願ひ出てはと言ってきた、時期早だ待ってくれと言つてあるんだ、大さん気持ちは分かるけど待ってくれ」

「一平さん、こやつは否こやつ等が適しているかな一平さんの存在を知った、人一人を殺害している気負つけてくれ、そんで約束してくれ決行日には一人で行かんように俺も連れてつてくれ」

一平はキツつと大さんの眼を見肯いた。

YYと騒ぎ布切れ付けただけの様な女三人が入つて来た、時ならぬ光景に若主人は眼をパチクリ。

「一平待った、自分等は朝昼一緒、天ざるの大盛りお願い、あつ大さんごめん挨拶遅れておはよーございまーす、のりちゃんは知っているよね自分の右は松坂里英さん、のりちゃんのC A仲間で通称りえちゃんです、こっちは高輪署の大泉刑事さん、通称大さんです」

想わぬ女性の出現と紹介で、おつお大泉ですと口籠つてしまった。

「マキー、お前等ゆんべは飲み過ぎたな口調が可笑しいぞ」

分かる、普通にしゃべっているんだけど、あつそーだカード有難うございました、助かつちやったーとマキが言い頭を下げた、のりとりえも。

「のりちゃんにりえちゃんマキに付き合つてくれて有難う、それと良い煙火見物でしたか」

最高の煙火見物だったって、家に戻り風呂に入り駄弁つたら今度はレミーマルタン飲み連れてつてと言つてたよ、とマキが言い二人も肯き加減。

一平はなぬーと言つた表情を浮かべた、お待ちーと大天ざる五つが座卓に並ぶ、これ食べたらまりさんのコーヒー飲

み自由解散と再びマキが言う。

女三人の食欲とマキの迫力に大さんは圧倒されつばなし。食べながらマキが更に言う。

「大さん、何か捜査に進展は、自分抜きで行動しようもんならどうなるか分かっているよね」

大さんにその口の聞き方は何だと一平が制した。

「マキちゃん抜きで捜査はできんよ捜査状況は逐一報告するよ、仕損じたとしても一平さんに聞けば分かります、今日はキザ監察官が一平さんの存在を知った、まりさんやチームいっぶくのメンバーさんにも何をしでかすか分からない、と伝え気負つけるようお願いに来たんだ」

「はーい、分かりました気負つきます」

素直に返事はしたがと皆に聞こえんように一平はブツブツ。